

真駒内川水辺の楽校 2015

1 活動概要

平成6年度に建設省の「水辺のウェルネス懇談会」プロジェクトがスタートし、協議会、推進協議会を経て、十数年間、真駒内川流域をフィールドとして活動してきた。

本年度は、春1回、夏3回、秋1回、冬2回の計7回の活動計画でスタートしたが、夏は2回、冬は1回の活動で、全5回の活動となった。

2 春の活動

春は、例年、活動スタッフの顔合わせの場と位置づけている。今後ボランティアとして登会の活動を手伝ってくれる大学生達4名と山菜に詳しいスタッフの一人の指導の元、真駒内スキー場跡地で山菜取りを行った。山菜採りなどあまり経験の4人だった。

持ち帰った山菜を彼らと一緒に分類すると、タランボ、ヨモギ、ニンソウ、エゾエンゴサク、ギョウジャニンニク、イタドリ、フキノトウ、イラクサ、ヨブスマソウなど、多彩な山菜が盛りたくさんであった。

洗った後は、彼ら自身に天婦羅揚げを体験してもらい、春の恵みに皆で舌鼓を打って、自然の恵みに感謝し、今年度の活動に思いをはせた。



3 夏の活動

夏の1回目は、大学生ボランティア2名と大人のボランティア3名の参加を得て、札幌市豊平川さけ科学館に会場と講師という全面的な支援をいただき実施した。

親子と併せて総勢46名で、スタッフから魚や水生昆虫などの川の生きものたちの捕まえ方を学んだ後、真駒内川へ入って、親子で夢中になって魚たちを捕まえた。

水槽に放した生き物たちを講師から解説してもらおうと、カジカ、フクドジョウ、ウグイ、ヤマメ、スジエビ、ヤツメなどの魚類の他に、巻貝のカワニナ、ヘビトンボ、ヒラタカゲロウやモンカゲロウなどのカゲロウの仲間、カワゲラの仲間、ヒゲナガカワトビケラ、石を纏ったエグリトビケラや植物の茎などを筒状に纏ったツツトビケラ、モイワサナエ、コオニヤンマ、カワトンボのヤゴなどたくさん生きものたちがいて、皆で多くのことを学んだ。

午後は、今年度新調したライフベストとヘルメットをつけて川流れを楽しんだ。怖がる子もいたが、楽しくて止まらなくなる子達もいて、楽しい一日を過ごした。

夏の2回目は、札幌市立真駒内公園小学校の環境学習活動（48名）を水辺の楽校としてバックアップした。学生ボランティア6名の応援を得て、講師には、流域生態研究所の妹尾優二氏の参加をいただいて、楽しい学習のお手伝いが出来た。ライフベストとヘルメットの不足分については、財）河川財団からお借りすることができた。





4 秋の活動

秋は、札幌市豊平川さけ科学館の「さっぽろサケフェスタ2015」に例年通り出展して、真駒内川に生息する魚や水生昆虫を早朝に捕獲して、水槽展示を行い、また、流木や木の実などを使用した工作を催した。

大人も子どもも真駒内川に生息する生きものたちに驚き、目を丸くしていた。まだまだ、川の生きもののことを知らない大人や子どもがいることを思い知らされた。

工作は、総勢139名の親子が取り組んでいたが、途中からはむしろ大人がのめりこんで作品制作を楽しんでいた。



5 冬の活動

冬は、ツリーイングの手配が付かず、カンジキウォークのみのかつどうとなった。木製の和カンジキを着けて、講師の案内で午前中の晴天の中で薄っすらと積もった雪原に残る動物たちの足跡や野鳥の鳴き声を聞きながら心地よく歩いた。

途中で見晴らしの良い丘に登って札幌の南区の眺めを楽しみ、下りは尻すべりをして、大の大人が歓声を上げていた。

昼は、枯れ枝を集めた焚き火で、枝に巻きつけたパン種や枝に刺したマシュマロ、ソーセージを焼き、スタッフが用意したホットワインやコーヒーを楽しんだ。

最後は、現在は空き家となっている藤野の麻生山荘を尋ねて往時の姿に思いを馳せた。



6 活動の広報

活動を通じて、川やそこに棲む生き物たちのことを知らない親子がまだ多数いることが判り、我々のささやかな活動の継続の必要性を改めて感じた。

活動の継続のためには、活動内容の広報が必要であり、当年度の活動報告書を作成して（現在作成中）、要所に配布・設置することが重要である。

また、ICTの充実はことに重要であり、当会のHPをスタッフがより更新しやすく使いやすく万人が閲覧しやすいものへと改良する（現在作業中）ことが、活動を広く知ってもらう上で大変役に立つと考える。

7 活動の総括

活動回数としては、計画の7回に対して5回であったが、何れの回も参加した人たちは、川を楽しみ、学んでくれたものと思うが、これらのことをまだまだ知らない人々も多いのも事実である。

全ての活動に必要な道具類を自前で用意することは出来ないが、同様の活動を行う他の団体と互いに足りない道具類の融通をしようことで、活動が充実したものとなる。この様な横のつながりを深め、協力し・助け合う体制作りが大切である。

当会は、十数年の活動を通じて高齢化が進み、スタッフ不足となっており、大学生ボランティアなどの若手の参加は、今後の担い手育成のためにも重要である。そのためには、交通費や食費としてのボランティア謝金は、基本的な費用として必要不可欠である。

上記の様な状況を改善するためには、広報が重要であり、活動報告書の作成とＨＰの改良が大いに役に立つものとする。